

特急「エルム」函館殺
人事件

新庄雄太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

函館山中で記憶喪失になっていた美女を保護した海藤龍吾と桜内梨子と津島善子は、彼女をその男に過去を探るように依頼した。手掛かりは、成子の持っていた名刺の男・江川友二郎だけであったが、その頃、江川は札幌から上野へ向かう寝台特急「エルム」の車内で毒殺されていた。函館へ単身赴任していた江川の身辺に成子の影はなく、彼女は藤野高彦と名のる男と函館に来ていたことが判る。だが、藤野は姿を消しており、何者かが二人の荷物をホテルから持ち去っていた。犯人の狙いは何か？そして彼女の記憶に封じ込められた忌まわしい事件の構図は。

目次

| | | |
|-----|----------|----|
| 第1章 | 記憶喪失 | 1 |
| 第2章 | 「エルム」で毒殺 | 6 |
| 第3章 | 函館の女 | 10 |
| 第4章 | 病室に消えた女 | 15 |
| 第5章 | 偽造名義 | 19 |
| 第6章 | 13分の空白 | 23 |
| 第7章 | 崩れたアリバイ | 28 |
| 第8章 | 犯人逮捕 | 32 |

第1章 記憶喪失

高校生の海藤龍吾は、津島善子と桜内梨子と小原鞠莉と高見千歌と黒澤ルビィと渡辺曜と一緒に函館へやってきました。

「ここが函館ね。」

「うん。」

「ついに来たんだ、私たち。」

「うん。」

そして、「函館のご当地アイドルの 세인트スノーの聖良と理亞のライブが始まった。

「おー、すごいやー。」

「うん、すごいね。」

「なかなかやるわね。」

「うん。」

세인트スノーのライブが終わると、今度は千歌と曜とルビィのユニット「CYaR On!」のライブが始まった。

「すごいわ、ルビィちゃん。」

「あいつも、やれば出来るじゃん。」

「ギラン！、次は私たちよ、行くわよりりー、マリー。」

「ええ。」

「次は私たちね。」

と、3人は舞台へと。

「おつ、次は梨子と善子の番だぞ。」

「えつ、マジで。」

と、善子は言った。

次は、Guilty Kissのライブが始まった。

「やるな、善子と梨子。」

ライブが終わると、龍吾は梨子に言った。

「ありがとう、函館まで来てもらっちゃって。」

「いいんだよ。」

「よかった、一緒に行けて。」

次の日、龍吾と梨子と善子は函館市内を散策をしました。

劈血碑のある。幕末に箱館戦争で死んだ旧幕軍の土方歳三以下、800名以上の慰霊がある。

そして、その女性は。

「ここは、どこかしら。」

と呟きながら、そしてまた。

「あたし、どうしてこんなところにいるのかしら。」

と、言っていた。

「ねえ、この女性どうしたのかしら。」

「何か、元気がないみたいだね。」

「行ってみようか。」

梨子は、その女性に声を掛けた。

「どうしました。」

「あの、ここは。」

「どうしたの。」

「この人、何か言っているわ。」

「善子、龍吾、もしかしたら、この人記憶喪失かも知れないわ。」

「記憶喪失!。」

と、龍吾と善子は驚いた。

善子と龍吾たちはその女性に記憶のある場所をまわって見たが、その女性は誰かわか

らずじまいだった。

「とにかく、その女性はホテルに予約しているかもよ。」

「うん、そのホテル分かる?。」

「ええ、少しは覚えているけど。」

さっそく、龍吾と梨子は同じホテルへ行き、その女性を送ってもらおう事になった。

「ありがとうございます。」

「イヤー、それほどでも。」

「本当にありがとうございます。」

そして、龍吾と梨子は同じ部屋に入った。

「あの女性、記憶が少し戻ったのかな?。」

「うん、そうかもね。」

そこへ、善子がやって来た。

「お待たせ、リリー。」

「何だ、善子も一緒か。」

「うん、部屋は別だけだね。」

そして、その記憶喪失が事件が起きるとはだれも予想はしなかった。

第2章「エルム」で毒殺

寝台特急「エルム」は、札幌を19時42分に発車する。上野には翌日の12時45分に着く。

途中停車駅は千歳空港、苫小牧、登別、東室蘭、洞爺、伊達紋別、長万部、八雲、森、大沼公園、函館、青森、八戸、盛岡、一ノ関、仙台、福島、郡山、黒磯、宇都宮、大宮である。

函館には深夜0時06分に発車する。

「エルム」は夜を走り続けてきたが、そしてすでに夜明けである、5時27分に盛岡を発車して、10分ほどが経っていた。夜はすでに明けかけていた。

そして、事件が起きた。

男が喉を抑えながら、ベットから転げ落ちた。

「どうしました。」

「一体何事だ。」

と、様子を見に来ていた。

「私、車掌を呼んでくる。」

と、1人の客が車掌を呼びに行つて来た。

「車掌さん、大変です、寝台で男の人が苦しんでいるんです。」

「どうしました。」

「こつちです?。」

5号車、10番下段席の乗客が叫び声をあげた。

「君、どうしたんだ、大丈夫か!。」

そこへ、特捜班に事件の知らせが入つた。

「何、寝台特急「エルム」で倒れて苦しんでいる、わかりました、直ちに捜査をします。」

と、電話を切つた。

「寝台特急「エルム」で男性の倒れた。」

「何。」

特捜班の南は、高山と桜井と岩泉と伴つて上野駅へ直行した。

12時45分、寝台特急「エルム」は上野駅に到着した。

「はい、下がつて、下がつて。」

「はい、鑑識が通ります。」

1時11分、警視庁のパトカーと捜査一課の刑事が到着した。

現場は慌ただしい様子だった。

「発見したのはあなたですね。」

「はい。」

「その人が、苦しんでベットに寝転んだんですね。」

「ええ、様子がおかしいと思って車掌を呼んだんです。」

「その時、不審人物は見えませんでしたか?。」

「そこまでは。」

そして、被害者の男性には毒物で殺害した可能性もある。

「あつ、南主任、桜井、被害者の身元がわかりました。」

「本当か、高山。」

「ええ、被害者は東京在住の江川友二郎、34歳です。」

「うん、それで死因は?。」

「詳しいことは解剖待ですが、恐らく毒殺ではないかと。」

「毒殺か。」

寝台特急「エルム」で起きた毒殺は、所轄の上野北警察署に設置された。

「列車内で毒殺か。」

「はい、問題はどこに混入したか。」

「ウイスキーの瓶に混入したんじゃないかな?。」

「もしかしたら、注射器で毒殺したって事も考えられないか?。」

「桜井と岩泉もか。」

そして、高山は言った。

「犯人は、どこかの駅で消えたのか。」

「考えられるわね。」

と、推理を試してみた。

第3章 函館の女

プアーン!

青函トンネルから、南と高山が乗ったL特急「はつかり」は函館へと驀進していくのだ。

はこだてー、はこだてー、ご乗車有難うございました、終点の函館です。

と、アナウンスが流れた。

「やっつと、函館か。」

「函館と言えば、朝市だよ。」

「高山は食い系か。」

「アハハハ。」

と、苦笑いする。

「函館は北海道の玄関である、人口は30万余、札幌、旭川に次ぐ第3の都市である。

「劈血碑で女性が発見した。」

「ええ、この辺りで1人後と言っていたんです。」

「それで、その女性が発見したのを誰かわかりますか?。」

「さあ、思い出しましたよ、静岡から来た高校生だよ。」

「その高校生は解りますか。」

「多分、函館市内を観光していると思いますよ。」

早速、南と高山は静岡の高校生を探すことにした。

「高山、あの高校生かな?。」

「うん、間違いない。」

南と高山は、龍吾と梨子と善子に会って話を聞くことにした。

「すいません、鉄道公安隊の者です。」

「ちよつと聞きたいことがあるんですが、よろしいでしょうか。」

そして、善子は高山に行った。

「で、何か事件でも起きたの?。」

「実はですね、寝台特急「エルム」の車内で男性の毒殺死体が発見されたんです。」

梨子と龍吾は驚いた。

「えっ、毒殺!!。」

「ええ、B寝台の下段の方ですね。」

「この女性について何だけど、何か知ってるか。」

「そうね。」

「そう言えば、昨日記憶喪失の女性に会ったけど。」

「今どこにいるかわかる。」

「昨日はこの女性とホテルで別れて、それ以降は会っていないの。」

「じゃあ、ホテルで別れたんだね。」

「はい。」

「なるほど。」

早速、南と高山は女性が泊まったホテルへ向かった。

「ああ、この女性ですか?。」

「ええ。」

「昨日泊まられて、今日チェックインされています。」

「あの一、その女性の名前は。」

「そこまでは。」

「どうも、ありがとうございます。」

そして、高山は言った。

「あの記憶喪失の女ってどんな人かな?。」

「この件は、班長に耳に入れておこうか。」

「うん。」

高山は、すぐに高杉班長に報告した。

「えっ、記憶喪失の女。」

「はい、劈血碑で見かけたとその高校生が言ってるんです。」

「うん、わかった、引き続き捜査をしてくれ。」

「わかりました。」

南と高山は、記憶喪失の女の行方を追う事になった。

「主任、この女性。」

「ああ、似てるな。」

その女性は南と高山に行った。

「あの、あなたは。」

「鉄道公安隊の高山です。」

「公安主任の南です。」

と、手帳を見せた。

「鉄道公安隊、ですか?。」

「ええ、あなたを探していたんです。」

「そうですか。」

「あなた、名前は。」

「わからない、わからないわ。」

そして、彼女はそう言つて函館市内の病院へ搬送した。

「とにかく、その女性は入院させます。」

「それでは、お願いします。」

そして、高山と南は盛岡行の特急「はつかり」と東北新幹線「やまびこ」に乗り次いで東京へ戻つた。

第4章 病室に消えた女

「静岡の高校生が、記憶喪失の女性を保護したと。」

「はい、その女性はホテルで一緒だと言っていました。」

「そうか、その女性は何かの事件に会っているかだ。」

「とにかく、この事件と記憶喪失の女とはどんな関係してるんでしょうか。」

そこへ、松本と小海がやって来た。

「班長、被害者の江川の死因は青酸系毒物と判明しました。」

「青酸系の毒物か。」

「被害者が飲んでいたウイスキーに混入していたんです。」

「そして、起きた頃に毒殺されたって事か。」

「はい。」

「しかし、気になりますな。」

「恐らく犯人は、札幌から盛岡へ消えたんじゃないでしょうか。」

「札幌から盛岡で東京へ行ったって事か。」

「班長、乗るとしたら東北新幹線の「やまびこ」じゃないでしょうか。」

「なるほど、札幌から盛岡までは寝台特急「エルム」に乗り、そこから東北新幹線に乗ったって訳か。」

「はい、可能性があります。」

「よし、その線で捜査してくれ。」

「わかりました。」

そう言つて、高山達は捜査へと向かった。

一方、函館では入院した記憶喪失の女が病室に消えてしまったのだ。

「えっ、病室の女が消えた。」

「手分けして探してくれ。」

「はい。」

病院では、記憶喪失の女を捜索していた。

「すいません、この男を知りませんか。」

「誰かを探しているのか。」

「はい、この人です。」

「さあ、知りませんか。」

「どうも。」

そこへ、千歌と曜がその女に声を掛けた。

「あのー、この男性知りませんか?。」

「えっ、この男性。」

「さあ、知らないわ。」

そこへ、龍吾と梨子がやって来た。

「おい、大丈夫か。」

「う、うん、私は大丈夫よ。」

梨子は女に行った。

「おい、こいつ病院へ連れて行こうよ。」

「そうね。」

そう言つて、千歌と曜は病院へ連れて行つた。

「ダメじゃないか、無理しちゃ。」

「すいません。」

「どうも、ありがとう。」

「いえー、それほども。」

そして、千歌はその女性のものと思われる名刺を拾つた。

「これ、この女性の物かな。」

「ああ、層みたいだね。」

そして、記憶喪失の女性の身元が割れた。

彼女の名前は、野宮成子とわかった。

「でも、どうして函館へ来てたのかしら。」

「何か、彼氏でも探しているのかな。」

「きつと、そうよね。」

そして、梨子と龍吾はハリストス正教会へやって来た。

「2人で行くとロマンチックだわ。」

「ああ、そうだな梨子。」

「ええ。」

「あれ、善子ちゃんは?。」

「ここにいたのか。」

「あつ、墮天使の格好してたな。」

「好きだね、善子ちゃんは?。」

第5章 偽造名義

「リリー、私はここよ。」

「善子ちゃん、この女性知ってる。」

「ああ、記憶喪失の女ね。」

「うん、身元が割れたらしいよ。」

「本当。」

そして、成子は梨子と善子と龍吾にこの男性を探してほしいと写真を見せた。

「この男性を探してほしいの。」

「へえ、この男か。」

「その人の名前は?。」

「確か、藤野高彦って言う人よ、去年から単身赴任で函館へ来ていたの。」

「なるほど、その男を探しているって事か。」

「ええ、私、その記憶を思い出したの。」

「よし、俺は早速その男性を見つけてやるぜ。」

そこへ、茉莉がやって来た。

「オー、何か楽しそうですね。」

「あつ、茉莉ちゃん。」

「私も一緒に探しますわよ。」

「よし、俺と梨子と善子と茉莉でその男を探してやるぜ。」

「オーツ！」

そして、龍吾と梨子と善子と茉莉で藤野という男性を探すことにした。

その頃、特捜班は「エルム」で起きた殺人事件の話し合いをしていた。

「寝台特急「エルム」は札幌に19時頃に発車するんですよね。」

「そうだ、現場は客車の5号車で起きた。」

「犯行時刻は、函館から青森か八戸辺りが犯行でしょうか。」

「恐らく、青函トンネルを通過してる頃じゃないかな。」

「なるほど、その通過時間を利用して犯行を行ったのか。」

「ええ、その可能性があります。」

と、中野が言った。

「犯人が「エルム」に乗る直前に混入したんではないでしょうか?。」

「おお、その可能性があるな。」

「仮に犯人が新幹線に乗ったとして、犯人は盛岡駅で下車したって事は考えられるん

じゃないか。」

「もし、小泉の言う通りなら犯人は東北新幹線「やまびこ」に乗り換えたって事も。」

「もしそうだとしたら、盛岡で下車したって事も考えられるかもな。」

その頃、南と高山と小海と鶴岡と松本と梶村は函館へ向かつて捜査をしていた。

「という事は、盛岡で下車したって事は。」

「その可能性があるわ。」

そして、南と高山は龍吾と梨子と善子と茉莉に会った。

「あつ、南さんは公安隊でしたか。」

「この男性を探しているのか。」

「はい、成子さんが言ってるんだ。」

小海は、成子に話をかけた。

「という事は、成子はその男に偽名を使って止まってるって事か。」

「ええ、多分間違いないと思うわ。」

早速、南と高山達は函館市内のホテルを片っ端から当たることにしたが、藤野はどこへ入るのか。

「さあ、来ないわね。」

「そうですね、どうも。」

「イヤー、見かけないね。」
「どうも、ありがとうございました。」

第6章 13分の空白

「そうか、犯人は特急「エルム」を停車した後に、新幹線「やまびこ」に乗り換えて東京へ向かった。」

「ああ、それは考えられるな。」

「「エルム」が盛岡に到着するのは5時21分か、乗り換えたとしたら東北新幹線「やまびこ30号」に乗ることが出来るんだよ。」

「そうか、東北新幹線「やまびこ30号」に乗って上野か東京へ行つたと。」
「考えられるわね。」

91年6月に東北・上越新幹線に東京駅発着になった、東京から新潟と盛岡へ行くには便利になった。

新潟へは100分、仙台へは104分で行けて便利なダイヤになった。

「主任、問題は犯人は誰なんだ。」

「とにかく、その藤野を探すぞ。」

「はこ。」

函館朝市

「おばちゃん、この男を知らんか。」

「さあね、あまり見かけんね。」

「そうですか。」

早速、南と高山達は函館朝市の周辺を聞き込みをすることにした。

「ああ、この人ね。」

「見かけました。」

「いや、私は知らんぞ。」

「そうですか?。」

「どうも、ありがとうございます。」

聞き込みを終えた高山と小海たちは、すぐに南主任の方へ集まった。

「どうだった。」

「周辺を聞き込みをしたんですが、藤野は見かけませんでした。」

「そうか。」

そこへ、松本がやって来た。

「主任、今班長から連絡が会って、どうやらその客は偽名らしいんだ。」

「何、偽名だと。」

「ああ、1人の男らしい。」

「この男だ。」

「えっ、本当か。」

「あいつ、中丸孝也ではなく庄崎栄二って言うのか。」

「調べて見たら、氷川軽金属の社員だそうだ。」

「そうか、つまり藤野にはアリバイがあるって事か。」

「ええ、その可能性がある。」

その頃、善子と梨子と龍吾と成子は、捜していた藤野を発見した。

「あつ、見つけたぞ。」

「あなたが藤野さんですね。」

「ああ、そうだけど。」

「藤野さん、無事で良かったわ。」

「ああ、ごめんよ心配して。」

そこへ、南と高山がやって来た。

「藤野高彦さんですね、鉄道公安隊の南です。」

「同じく高山です。」

「早速ですがちよつと話を聞かせて下さい。」

南と高山は所轄の函館西署へ向かった。

函館西警察署

「じゃあ、あなたは仕事の都合で函館へ単身赴任してきたんですね。」

「はい、勤務先の関係で函館へ異動してきました。」

「なるほど。」

「という事は、犯人は別にいるって事か。」

「考えられるわね。」

「よし、とにかく調べることにしよう。」

南と高山は、北海道警察の協力し特急「エルム」の殺人を捜査することにした。

「鶴岡、時刻表あるか?。」

「はい。」

と、鶴岡は時刻表を南に渡した。

「という事は、「エルム」が盛岡に5時21分だから27分に発車する。」

「じゃあ、やまびこの方は。」

「やまびこ30号」だと盛岡を6時05分に発車し、上野へ着くのは9時26分に着きます。」

「問題は、犯人はどうかやって新幹線に乗って上野へ行ったかだ。」

「主任、この犯行は可能でしょうか。」

「とにかく、アリバイを調べることにしよう。」

第7章 崩れたアリバイ

そして、東京公安室の公安特捜班のは高杉班長は残りのメンバーで捜査会議をしていた。

「犯人の足取りがわかった、犯人は札幌から特急「エルム」に乗っていた、発車するのが19時42分、犯行時刻は深夜の1時頃だ、犯人は毒入りのウイスキーを飲み、そして仙台辺りで苦しんだ、犯人は盛岡へ下車した、

盛岡に着くのは早朝の5時21分に着く、そこから新幹線に乗ったんだ。」

「そうか、犯人はそれを利用したんだ。」

「この時間帯だと、犯行は可能ですね。」

「盛岡を6時05分に発車して、上野へ着いたのが9時26分。」

「うん、それは可能だ。」

「どうして、東北新幹線に乗ったんだらうか。」

「本当に藤野が犯人かな?。」

「わからんぞ。」

「今、高山達も函館へ向かっているから。」

「しかし、よくわかったんだね高山は。」

「これで、犯人のアリバイは崩れたって訳か。」

そして、南と高山達は藤野に事情聴取していた。

「じゃあ、犯人はこの女に強要されていたって事か。」

「ええ、俺を罪を着せるためにね。」

「そうか、そのせいで彼女は記憶喪失になったのか?。」

そして、小海は藤野に行った。

「じゃあ、犯人の顔は覚えています?。」

「ええ、氷川という専務です。」

「なるほど、氷川は野宮に強要し、レイプしたと。」

「そして、偽名を使っていたホテルに泊まった人はこの会社の調査員と。」

「ええ、間違いありません。」

「その調査員の名前は?。」

「調査員名義は清川 春彦で、本名は瀬田 通か。」

「はい。」

「じゃあ、あなたは新幹線「やまびこ30号」には乗ってましたか?。」

「いいえ、乗ってません。」

「そうか、東北新幹線「やまびこ30号」に乗るのは不可能か。」

「よし、瀬田の捜索だ。」

「はい。」

そこへ、函館西署に刑事たちが慌てている様子だった。

「何があつたんです。」

「今、函館西署管内で男性の他殺死体が発見されたそうです。」

と、警官が言った。

南と高山達はパトカーに乗り、現場へ向かった。

「凄い人盛りだね。」

「ああ。」

「あれ、この男は?。」

「まさか!。」

高山と小海は驚いた、瀬田が死体となっていた。

「函館で殺されるなんて。」

「本当だよ。」

その事件はすぐに高杉班長に伝えられた。

「何、瀬田が函館で消された。」

「ええ、恐らく犯人は氷川と見て間違いありません。」

「やはり、犯人は氷川ですか。」

と、菅原は言う。

「ええ、犯人は盛岡で新幹線に乗ったんだと。」

「さすがだよ、南と高山は。」

「逮捕は時間が問題だな。」

と、高杉は言う。

第8章 犯人逮捕

犯人の身元が割れた南と高山と小海と鶴岡は早速、犯人の逮捕へ向かう。

「江川と瀬田を殺害したのは恐らく氷川だ。」

「じゃあ、恐らく庄崎栄二を殺害するんだ。」

「それじゃ、庄崎が言ってた中丸は?。」

「そいつも内部調査員だよ。」

「そうか。」

「庄崎を保護しよう。」

「ええ。」

そして、高山は高杉班長に報告した。

「何、犯人は氷川。」

「ええ、氷川は庄崎を殺すつもりです。」

「後、野宮も狙われるわ。」

「うん。」

南と高山は函館西署の覆面パトカーに乗り、野宮と庄崎の保護へ向かった。

「問題は氷川はどこへ逃げ込んだのかだ。」

「犯人氷川は恐らく。」

その頃、梨子と龍吾は楽しく散策していた。ところが、氷川が野宮を車に連れ去うと
していた。

「あつ、野宮さん。」

「大変だ。」

ところが、氷川は龍吾と梨子を乗せ逃走した。

「あつ、大変だわ。」

「ナンバーは覚えた。」

「うん。」

茉莉と善子は交番へ行き、連れ去られた車のナンバーを言った。

「お巡りさん、リリーと龍吾が。」

「車で連れ去られたのよ。」

「ええ。」

そこへ、無線が入った。

若い女性と2人の高校生が車に乗せ、逃走してる模様、

と、無線が流れた。

「主任、高校生の二人つて。」

「よし、廃墟付近だ。」

氷川は、野宮と龍吾と梨子は車から降りた。

「ねえ、放してよ。」

「俺をどうするんだ。」

「いいから、来い。」

氷川は、野宮と龍吾と梨子を監禁した。

「そんなことしても、いずれ捕まるんだから。」

「そうよ。」

氷川は、ナイフを持ち脅した。

「俺が捕まると思ってるのか?。」

「そうか、やっぱり氷川が特急「エルム」で毒殺したのね。」

「よくわかったな、全て俺の計画さ。」

「そうか、あなたが犯人ね。」

そこへ、2人の男がやって来た。

「よくやった、氷川。」

「ああ。」

「さあ、例の物を持ってきたんだらうな。」

「ああ、約束通り。」

「これで、山分けだな。」

「ああ。」

そこへ、庄崎がやって来た。

「その帳簿を返せ。」

男は銃を向けた。

「動くな。」

「えっ。」

と、庄崎は驚いた。

「どうやら、俺の悪運の強い男だな。」

そこへ、南と高山と鶴岡と小海がやって来た。

「動くな。」

「何だてめえは。」

「もう、逃げられないわ。」

2人は、拳銃で発砲した。

「やっちまえ。」

と、氷川は逃げようとした。

そこへ、鶴岡が先回りしていた。

「おい、どこへ行くんだ。」

「アハハハ。」

と、そこへ高山は氷川を手錠をかけた。

「くそー。」

小海は、梨子と龍吾と野宮と庄崎を保護した。

「大丈夫でしたか。」

「ああ、何とか。」

そこへ、鶴岡がやって来た。

「主任、氷川を逮捕したぜ。」

「そうか、よくやった。」

そして、野宮は。

「思い出したわ、私、氷川に強要されていたんだわ。」

「そうか、やっと記憶が戻ったのね。」

「よかった。」

こうして、特急「エルム」殺人事件は解決し、犯人氷川を逮捕した。氷川は2人の男

と組んで2重帳簿を持ち出していた後に江川と瀬田を殺害したと自供した。

「大丈夫か、2人は。」

「ええ。」

「俺も大丈夫だ。」

梨子と龍吾も保護した。